The Japan Lung Cancer Society

109 糖鎖抗原腫瘍マーカーシアル化 Lewis^x(SLEX), シアル化 SSEA-1 (S-Xi) の肺癌患者血清中における比較検討

長崎大学医学部第二内科
○迎　寛，福島喜代康，平谷一人，小森清和，朝長昭光，神田哲郎，広田正毅，原　耕平

目的：最近腫瘍マーカーとして糖鎖抗原が注目されているが，これら糖鎖抗原腫瘍マーカーの内で我々がUCLAのTerasaki教授らと共同で作製したCSLEX1抗体で検出されるSLEXと，Hakomoriらが作製したFH-6抗体で検出されるS-Xiは，抗原構造が明らかで，しかもS-Xiはちょうど血液型糖鎖であるi抗原の末端にSLEXが結合した構造を示している。この二つの糖鎖抗原はともに肺癌に特異性の高い抗原とされておりこれらを比較検討することは興味あることである。
対象・方法：肺癌患者148例（腺癌57例，扁平上皮癌40例，小細胞癌17例，大細胞癌８例，未分化癌10例，その他15例）を対象とした。健常者のMean＋3SD (148U/ml) をcut off pointとした。対照として良性呼吸器疾患101例を測定した。SLEXは蛍光EIAで測定し，S-XiはRIAにて測定した。
結果・考案：SLEXとS-Xiの陽性率を検討するとそれぞれ良性呼吸器疾患では3.0%, 6.9%, 肺癌患者全体では27.0%, 28.4%, 組織別では腺癌36.8%, 35.1%, 扁平上皮癌25.0%, 30.0%, 小細胞癌11.8%, 5.9%, 大細胞癌25.0%, 25.0%, 未分化癌33.3%, 50.0%, その他16.7%, 16.7%であった。測定条件が異なるが結果は極めて類似しており興味ある結果と思われた。今後更に検討したい。

110 肺癌患者血清中腫瘍マーカーの検討

東京医科大学外科
○國井　司、森山　浩、新妻雅行、河村一太
早田義博

目的：肺癌患者の治療経過及び進行度の把握、再発の早期発見の指標として、肺癌患者血清中の各種腫瘍マーカーを測定し、それらの有用性について比較検討した。
方法：肺癌患者６５例（扁平上皮癌３１例、腺癌３０例、大細胞癌３例、小細胞癌１例）、及び他の悪性疾患１１例、良性肺疾患２例の計７８例について、血清中腫瘍マーカーＳＬＸ、ＣＥＡ、ＣＡ１９－９、ＳＣＣ、ＮＳＥを測定し比較検討した。
結果：肺癌患者血清中における各種腫瘍マーカーの陽性率は、ＳＬＸ；２４.６％、ＣＥＡ；２４.４％、ＣＡ１９－９；２０.３％、ＳＣＣ；３３.３％、ＮＳＥ；17.６％で、他の悪性疾患では、ＳＬＸ；０％、ＣＥＡ；１１.９％、ＣＡ１９－９；４０％、ＳＣＣ；０％、ＮＳＥ；０％であった。ＳＬＸは、特に肺腺癌の病期Ⅲ、Ⅳの症例において５３.３％と陽性率が高く、ＳＣＣは、肺扁平上皮癌の病期Ⅲ、Ⅳの症例に７５％と高い陽性率を示した。一方、ＣＡ１９－９では、他の悪性疾患においても高い陽性率を示した。ＮＳＥは、肺小細胞癌に高い陽性率を示した。これら各種の腫瘍マーカーを組み合わせて測定することにより、肺癌患者の経過をより正確に把握しうる可能性が示唆された。

111 肺癌における腫瘍マーカー陽性数の補助診断的意義

富山医科薬科大学医学部第１内科[1]，富山県立中央病院内科[2]
川崎　聡[1]、水島　豊[1]、平田　仁[1]、泉　三郎[2]、星野　清[1]、小西啓子[1]、森蔭俊彦[1]、丸山宗治[1]、山下直宏[1]、鈴木英彦[1]、矢野三郎[1]

［目的］：近年、各種腫瘍マーカーが肺癌の補助診断に用いられている。我々は肺癌患者血清中のCA19-9、CEA、NSE、SCC、TPAを同時測定し、これら腫瘍マーカー陽性数の補助診断的意義を検討した。
［対象及び成績］：肺癌患者51名（Sq=18、Ad=17、Sm=14、La=2）、非悪性呼吸疾患患者 99名を対象に、上記５種マーカーを同時測定した。その結果、1)肺癌、良性疾患患者での各マーカーの陽性率は、それぞれ CA19-9(40 U/ml≦)41%、10%、CEA(2.5 ng/ml≦) 47%、8%、NSE (10 ng/ml≦)33%、4%、SCC(2 ng/ml≦)35%、9%、TPA(120U/l≦)67%、9%であった。これらマーカーの正診率は72%～83%であった。2)肺癌、良性疾患患者での陽性マーカー数の分布は、それぞれ１種のみ陽性16%、31%、２種陽性33%、3%、3種陽性26%、1%、４種陽性14%、0%、５種陽性2%、0%、全て陰性10%、65%であった。１種のみ陽性の場合の肺癌である確率は 21%と低値であるが、２種陽性の場合の確率は 85%と向上した。
［結語］：５種マーカーを同時測定し、２種以上のマーカーが陽性となる場合は肺癌である確率が高いという成績が得られた。マーカー陽性数も、癌の補助診断上参考になると考えた。

112 原発性肺癌における血清NSE, SCC, NCC-ST-439, CEA測定の意義について

新潟大学医学部第二内科
○畠山　忍，永井明彦，中島喜章，来生　哲，荒川正昭

【目的】原発性肺癌患者の血清NSE, SCC, NCC-ST-439,CEAを測定し，その腫瘍マーカーとしての有効性を検討した。
【対象と方法】未治療の原発性肺癌患者56例（小細胞癌21名，扁平上皮癌10名，腺癌22名，腺扁平上皮癌２名，大細胞癌１名）と良性肺疾患16例について，NSE,NCC-ST-439はEIA法（各々8ng/ml，5u/ml），SCCはRIA法（2ng/ml），CEAはEIA法，一部RIA法で測定した。
【結果】肺癌患者全体の陽性率は，NSE 52%, SCC 49%, NCC-ST-439 48%, CEA 52%で，良性群は各々，0%，17%，25%，18%であり，全てのマーカーが肺癌で有意に高かった。組織型別に見た陽性率は，各々小細胞癌が57%，30%，29%，50%扁平上皮癌が40%，80%，60%，33%腺癌が55%，55%，55%，38%であった。NSEは組織特異性は得られなかったが，小細胞癌の病勢の進行とともに上昇する傾向が見られ，また，SCCは扁平上皮癌で，NCC-ST-439は非小細胞癌で有意に高かった。
【結語】肺癌の補助診断法として，NSE, SCC, NCC-ST-439, CEAの各マーカーを組み合わせることは有用であり，特にSCCは扁平上皮癌の診断には有効だった。また，NSEは小細胞癌の治療経過のモニターマーカーとして有用と思われた。

NII-Electronic Library Service